

Title	まえがき ; テーマは「哲学は進歩したか?」
Sub Title	
Author	石川, 史郎(Ishikawa, Shirō)
Publisher	
Publication year	2018
Jtitle	理系の西洋哲学史 ; 哲学は進歩したか? (2018. 6) ,p.i- iv
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	慶應義塾大学工学部大学院講義ノート
Genre	Book
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO52003003-00000000--002

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

理系の西洋哲学史；哲学は進歩したか？

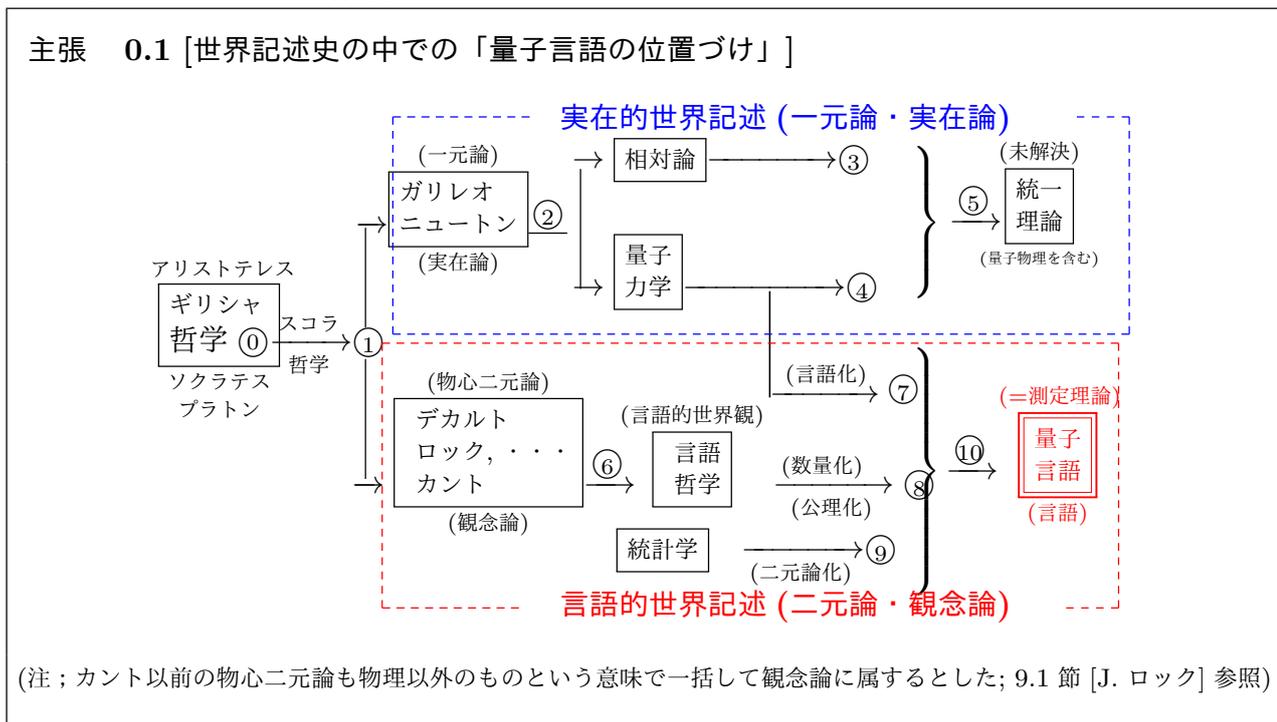
慶應義塾大学工学部大学院講義ノート (Web 版；(KOARA 2018))
「コペンハーゲン解釈；量子哲学」の雑談編・副読本

石川史郎

「理系の西洋哲学史」 [目次; 他](#)

まえがき； テーマは「哲学は進歩したか？」

下図が著者の大学院の講義内容の全体像である。



上図の量子論【② - ⑦ - ⑩】と統計学【⑨ - ⑩】の本論の部分の Web 版は次のように公開されている。

(A) [コペンハーゲン解釈；量子哲学. 534 pp.] KOARA 2018

本編は (A) 文献 KOARA 2018[コペン] の雑談編で、特に、上図の西洋哲学史【① - ② - ⑥ - ⑧】の部分の Web 版である*1

*1 書籍版はそれぞれ以下の通りであるが、本講 (Web 版) はエッセンスの部分を抜粋して、一目でわかるように絵を多用し説明した。

- S. Ishikawa, *Linguistic interpretation of quantum mechanics: Quantum language, Version 3* Research Report (Department of mathematics, Keio university), KSTS-RR-17007, 2017, 431 pages 和訳：量子言語入門 (紫峰出版)
- S. Ishikawa, *History of Western Philosophy from the quantum theoretical point of view, Version 2* Research Report (Dept. Math. Keio Univ.) KSTS-RR-17/004, 2017, 139 pages 和訳：「量子論から見

本講の雑談編は、主張 0.1 の上図となるべく辻褄があうように、「西洋哲学史」という題目のフィクションを書いた。すなわち、

「西洋哲学史はこうあってほしい」という著者の願望を書いた

本来、西洋哲学史を書くとはこういうフィクションを書くことなのだと思う。ある最新理論を得たと信じている者ならば、その最新理論から逆算して見える西洋哲学史の風景を語りたくなる欲望を持つもので、その欲望を抑制することなど不可能なのだと思う。しかし、

事実なんてない。あるのは解釈だけ。

とは言っても「史実」とのギャップがあまりかけ離れるのは好ましいとは言えないが、これについてはあまり気にしないで、書いてしまった。というより、西洋哲学史に関する読者の教養の方が著者のそれより上回っている可能性の方が大なのだから、そのようなことを気にしては何も書けなくなってしまう。

著者のアドバンテッジは、(西洋哲学の終着点らしい)量子言語を熟知していることだけ

である。

さて、本講のメイン・テーマは、次の哲学の最重要未解決問題に答えることである。

(B) 哲学は進歩したか？



これは容易に答えられる問題ではない。しかし、普通に考えれば、哲学は文学部哲学科で専門的にやっているはずで、一種の文学なのだから「進歩はしない」だろう。紫式部の「源氏物語」と夏目漱石の「吾輩は猫である」を比べても、どちらが進歩したなどと言えないだろう。

進歩しないのならば、理系にとっては、哲学はオワコンだし、事実、多くの理系はそう思っていると思う。

しかし、本講では次を結論する。

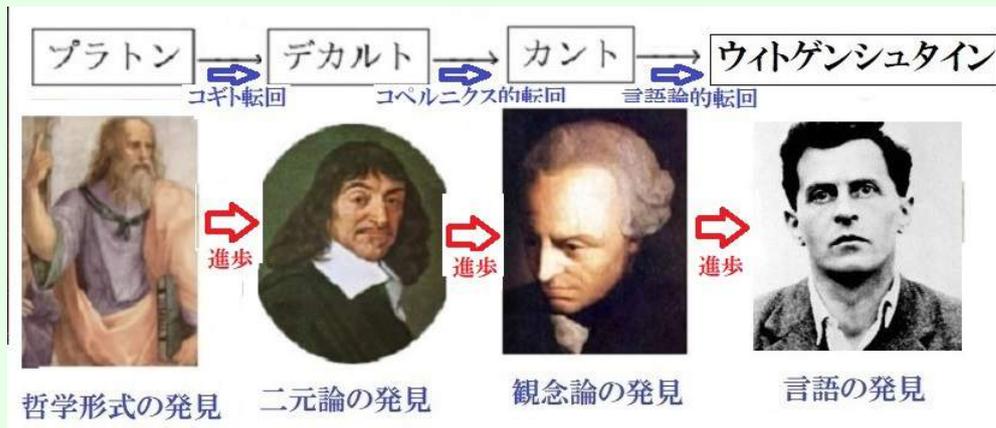
た西洋哲学史；改訂版（紫峰出版）」。

(C): 本講の結論

西洋哲学 (世界記述の哲学) の本流は、

● **二元論・観念論の追究を目的としている**

と見做してよいならば、**進歩**してきた； すなわち



である

さて、著者は次のストーリーが好きである。

(D) 古代ギリシャの昔には、学問は哲学だけしかなかった。その中で「数」に異常な興味を持つ人たちがいて数学を始めた。数学は進歩発展する学問だったので、いつのまにか哲学と独立して一つの学問として確立した。同様に生物学や天文学や医学や心理学や物理学も哲学から生まれて進歩発展して一つの学問として確立して哲学から独立してしまった。欧米圏で「博士号」を「Ph.D(Doctor of Philosophy)」と呼ぶのは「すべての学問の起源は哲学だった」という名残である。そうだとするならば、今でも進歩発展して哲学から独立して一つの学問としてなりうる哲学の分野があってもおかしくない。それが

二元論的観念論

である。

と本書は主張する。しかし、文芸的な二元論的観念論は西洋哲学の本流を形成するわけで、これが哲学から独立してしまえば、哲学としても大事件かもしれない。この辺りのところをどういう折り合いをつけるかは、著者の力量の範囲外であるが、文芸的な二元論的観念論も永遠であ

ることを信じたい。

実際の講義では、9割の時間は(A)文献[KOARA 2018; コペン]に費やした。量子言語(≈量子力学)を理解するとは、結局、「量子計算の習熟に尽きる」わけで、そのためには、雑談不要で(A)文献[KOARA 2018; コペン]を何度も繰り返し読んで計算力をつけるしかないからである。

しかし、量子言語(≈量子力学)を教養の一つと考えるならば、西洋哲学史【① - ② - ⑥ - ⑧】との関連は興味深い。大学院の講義だからといって「研究」だけに拘らずに、このような遊びも必要と考えた。もちろん、

- 量子論という広大な分野の中には、理系の研究とはかけ離れたこんなフィクションのような世界が開けているということを発信したかった

という方が正確かもしれない。

図と絵とキーフレーズだけで読み進められるように書いたので、軽い気持ちで読んで、早く(A)文献[KOARA 2018; コペン]に進んでもらいたい。わざわざ「理系の」と題したのは、「理系の」と書けば「文系ならば許されないことを書くこと」も大目に見てもらえるような気がしたからであるが、さらに

- (理系の大学院の講義の一部なのだから)書かれていることを全て鵜呑みにする読者はいないだろう。「(A)文献[KOARA 2018; コペン]からの逆算の結果」と言っているのだから、本講の主張に同意するにしても逆算を確認してから同意してもらいたい

という気持ちを伝えたかったからである。もちろん、「**理系が読んでも面白い**」が一番の理由であることは当然のことである。

現状では、哲学と言えば、「人生哲学」、「経営哲学」、「恋愛哲学」等の処世術が主流かもしれない。そして、こんな便利な処世術ならば誰もが身につけたいわけで、人気があるのも納得できる。しかし、西洋哲学の本流の中心テーマはいつの時代も「二元論・観念論」であり、しかもこれが「理系の哲学」であることを明らかにする。

文芸的な「西洋哲学史 (by バートランド・ラッセル)」とか寓話的な「ソフィーの世界 (by ヨースタイン・ゴルデル)」などは、世界的に売れているだけではなく、「文系の西洋哲学史」として超一流の西洋哲学史だと思う。本書では、これらの「文系の西洋哲学史」とは一線を画す「理系の西洋哲学史」が書けたと思う。

石川史郎

2018年6月*2

*2 量子言語に関する最近の情報については、(<http://www.math.keio.ac.jp/~ishikawa/indexe.html>)を見

